

MEMORIAL DJ MITSU THE BEATS feat.Shing02

90年代ヒップホップをテーマに掲げるレーベル、C.r.e.a.m. Team Recordsの第一弾としてリリースされたシングル「Memento」。今年（2022年）4月にC.r.e.a.m. Team Recordsのエグゼクティブ・プロデューサーに就任したDJ MITSU THE BEATSがトラックを手掛け、Shing02をフィーチャリングゲストとして迎えたこの曲は、C.r.e.a.m. Team RecordsからリリースされるDJ MITSU THE BEATS自身によるプロデュースアルバム第一弾のシングルであり、このプロジェクトの今後を占う上で非常に重要な意味を持つ作品である。

仙台を拠点とするヒップホップグループ、GAGLEのメンバーであり、プロデューサーとして様々なアーティストの作品に携わり、国内外の音楽ファンから高い評価を得るなど、日本のヒップホップシーンの中で確固たる地位を築いてきたDJ MITSU THE BEATS。片や日本語と英語によるバイリンガルラッパーのバイオニアとして、90年代から北カリフォルニア・ベイエリアのヒップホップシーンにて活動を開始し、これまでソロや様々なプロデューサーとのコラボレーションによって通算三枚以上のアルバムを発表しながら、現在はハワイを拠点としながらワールドワイドに活躍するShing02。アーティストとしてこれまで全く異なる道を歩んできた二人であるが、日本人としてのヒップホップを追求してきたという意味では共通する部分は美に多い。

ちなみに、これまでのDJ MITSU THE BEATSとShing02の共演といえば、2014年にリリースされたGAGLEの通算5枚目のアルバム『VG+』に収録された「CA LA MODE」が知られているが、『VG+』の次にリリースされたアルバム『Vanta Black』の収録曲である「Flow」にShing02が参加したリミックスバージョンというのも存在している。この曲は正式にはリリースされておらず、非売品のCDのみに収録されたGAGLEファン垂涎のレア曲なのだが、両者の共演はこのリミックスを含めて、これまでたった二度しか行なわれていない。今回の原稿を執筆するにあたって、DJ MITSU THE BEATSとShing02から直接話を聞いたのだが、二人の言葉からは、実が彼らが共演するずっと以前から、お互いにファンであったことが伝わっている。

DJ MITSU THE BEATS：メントと（Shing02）を初めて聞いたのは、Mary Joyの「メン」『Tags Of The Times』（1998年リリース）に入っていた曲（A Day Like Any Other Remix（A Day Like No Other））だ。バイリンガルでラップするのは、

の人、めっちゃ格好良いな」って思いましたね。その後はやっぱり「Luv(sic)」とかも印象深いです。Shing02：2000年代前半に初めてGAGLEの曲を聞いて。オールドソックスなんだけど、すごく洗練されているって思いましたね。格好良くて、綺麗なビートを作る人なんだなっていうのがミツ君（DJ MITSU THE BEATS）に対する第一印象。だから「一度、会ってみたいな」っていう一方的な思いは、ずっとありました。

実際に両者が直接会ったのはずっと後のことで、Shing02がライヴのために仙台を訪れたタイミングなどに会うようになり、徐々に関係を深めながら、前述のアルバム『VG+』への参加などにも繋がっていく。さらにその延長上に今回のシングル「Memento」があるというわけだ。

DJ MITSU THE BEATS：C.r.e.a.m. Teamは90年代のヒップホップをテーマに作品を作るという話になって、自分の中で一緒にやりたいラッパーの候補としてすぐに名前の挙がったのがシンゴさんでした。単にレジェンドなラッパーというだけじゃなくて、オリジナリティが高くて、あんなスタイルで出来る人は他にいない。今回は海外にもアピールしたいっていう思いもあったので、英語でやって欲しいってお願いしました。

深い奥行きの中で鳴り響くピアノの音色に、一見シンプルながらも絶妙に心地よく絡んでくるビートで構成された「Memento」のトラック。DJ MITSU THE BEATSはShing02がラップするイメージを思い浮かべながら、このトラックを作り上げたという。

DJ MITSU THE BEATS：90年代のテイストのあるドラムの使い方をしつつ、今の自分の好きな感じのピアノとかを上手く混ぜたらなって思ってた。作りました。90年代のヒップホップがテーマではあるけれど、90年代のヒップホップをそのまま再現しようとは思っていないの。90年代のヒップホップをリスpektしながら、今の技術を上手く取り入れて。シンゴさんならちゃんとしたテーマで来るっていうのは分かっているの、それをサポート出来るようなトラックになるように意識しました。

Shing02：ミツ君からビートが送られてきて、「二つ返事」「やります」って答えて。絵を見て、題名を決めるような感じで、ビートを聞いて

「Memento Mori」という言葉が浮かんできて。そういう音から来た「死」のイメージと、あとはやっぱりコロナの最中だったっていうのもあって。それを掛け合わせながら、ちょっと言葉遊びもしたっていう感じですね。

どうか物悲しさが漂ってくるピアノのメロディはレクイエム（鎮魂歌）を彷彿させ、それが「Memento」（Memento Mori＝死を忘れるな）というタイトルにも繋がっていく。そして、「死」というテーマが軸にありながらも、流れるように展開していくリリックには、Shing02ならではの表現の豊かさや面白さが溢れ出ている。

Shing02：その時、たまたま録音モードだったので、ビートを聞いた初期衝動でパッと録って、パッと返して。何ヶ月もかけて緻密にリリックを書くっていう場合もあるけど、今回は良い意味でフリースタイルっぽい感じで出来たなって思います。あと、僕の最近のスタイルは、英語のラップに関しては、どれだけ難しい韻を踏んでやろうとじゃなく、全然シンプルな韻でいいから、韻と韻の間の描写で深いことを言いたいな感じで。英語だと「between the lines」（＝行間を読む）って言うけど、僕の場合は「between rhymes」だね。

例えば1バース目で、元バスケットボール選手のロバート・オーリーの名前がリリック中に出てくる部分は、Shing02がバスケット好きということを知っているファンであればニヤリとするだろうし、そのすぐ後にはドラマ『Breaking Bad』の主人公、ウォルター・ホワイトの名前も登場する。その二つの名前をしっかりとライミングの流れにハマながら、『Breaking Bad』のストーリーを知っている人であれば、それが今回の曲のテーマとも強くリンクしていることは容易に理解出来るだろう。「Memento」[Lament] [My mental] という二つの言葉を組み合わせたフックも、実にシンプルな構成ではあるが、その裏には心情の流れというものが描写され、実に深く響いている。

Shing02：僕にとってはプロデューサー（DJ MITSU THE BEATS）ありきの曲なんで、ラッパーとしてその曲の雰囲気壊さずに、出来るだけより深みを与えることをしたいんですよね。

DJ MITSU THE BEATS：ビートを作る時にね、「二つ返事」の感じがラップにつくれるんじゃないかな、」っていうイメージがある程度はあるんですけど。今回に関しては、「二つ返事」テーマで来たん

だっ」って驚いた部分もあったし、自分では思いつかないような深いテーマになったので、やっぱりシンゴさんに頼んでみて良かったなって思いました。

今回の「Memento」がC.r.e.a.m. Team Recordsからリリースされる自身のプロデュースアルバムの「核となる曲にもなった」というDJ MITSU THE BEATS。この曲を聞けば、彼が「90年代ヒップホップ」というテーマを咀嚼しながら、これからのようなアルバムを作り上げていくかはおぼろげながら見えてくるだろう。今回は特に90年代のUSのアンダーグラウンドヒップホップシーンの真っ只中にいたShing02が参加したことによって、本当にスペシャルな一曲に仕上がっているのは間違いない。

DJ MITSU THE BEATS：90年代のヒップホップをテーマにしているだけじゃない、その奥にある、90年代のヒップホップを通った人が作る今の音楽が見えなくなってしまいますね。この曲を聞いて「90年代ヒップホップじゃない」って言う人もいると思いますが、自分の狙っていた通りのものが出て来て良かったです。

最後に、通算3度目となる二人の共演を経て、改めてShing02から見たDJ MITSU THE BEATSの魅力が語ってもらった。

Shing02：僕にとっては最高の褒め言葉ですけど、最も安心して聞けるプロデューサー。ミツ君のビートは一つ一つの音がしっかりEQされていて、バランスも取れていて、ちゃんと試行錯誤されているっていうのが伝わってくる。全てにおいて無駄がないというか、もはや職人の域に達している。しかも、それをどうの昔に達していたわけですから、凄いですよね。

文 大前至（音楽ライター）

